

D坂の殺人事件

江戸川乱歩

青空文庫

(上) 事実

それは九月初旬のある蒸し暑い晩のことであった。私は、D坂の大通りの中程にある、
 白梅軒はくばいけんという、行きつけのカフェで、冷しコーヒーを啜すすっていた。当時私は、学校を出
 たばかりで、まだこれという職業もなく、下宿屋にゴロゴロして本でも読んでいるか、そ
 れに飽ると、当てどもなく散歩に出て、あまり費用のかからぬカフェ廻りをやる位が、毎
 日の日課だった。この白梅軒というのは、下宿屋から近くもあり、どこへ散歩するにも、
 必ずその前を通る様な位置にあつたので、随したがつて一番よく出入した訳であつたが、私とい
 う男は悪い癖で、カフェに入るとどうも長なが尻ちりになる。それも、元来食慾の少い方なの
 で、一つは囊のうちゆう中の乏しいせいもあつてだが、洋食一皿注文するでなく、安いコーヒー
 を二杯も三杯もお代りして、一時間も二時間もじつとしてゐるのだ。そうかといつて、別
 段、ウエトレスに思おぼしめし召めしがあつたり、からかつたりする訳ではない。まあ、下宿より何
 となく派手で、居心地がいいのだろう。私はその晩も、例によつて、一杯の冷しコーヒー
 を十分もかかつて飲みながら、いつもの往來に面したテーブルに陣取つて、ボンヤリ窓の

外を眺めていた。

さて、この白梅軒のあるD坂というのは、以前菊人形きくにんぎようの名所だった所で、狭かった通りが、市区改正で取拡げられ、何間道路なんげんとかいう大通になつて間もなくだから、まだ大通の両側に所々空地などもあつて、今よりずっと淋しかった時分の話だ。大通を越して白梅軒の丁度真向うに、一軒の古本屋がある。実は私は、先程から、その店先を眺めていたのだ。みすばらしい場末ばすえの古本屋で、別段眺める程の景色でもないのだが、私には一寸特別の興味があつた。というのは、私が近頃この白梅軒で知合いあになつた一人の妙な男があつて、名前は明智小五郎あけちこごろうというのだが、話をして見ると如何にも変り者で、それどころがよき相で、私の惚れ込んだことには、探偵小説好なのだが、その男の幼馴染の女が今ではこの古本屋の女房になつていてという事を、この前、彼から聞いていたからだ。二度本を買つて覚えている所によれば、この古本屋の細君なかなかというのが、却々の美人で、どこがどういうではないが、何となく官能的に男を引きつける様な所があるのだ。彼女は夜はいつでも店番をしているのだから、今晚もいるに違いないと、店中を、といつても二間半間口の手狭な店てせまだけけれど、探して見たが、誰れもない。いずれそのうちに出て来るのだらうと、私はじつと目で待つていたものだ。

だが、女房は却々出て来ない。で、いい加減面倒臭くなって、隣の時計屋へ目を移そうとしていた時であった。私はふと店と奥の間との境に閉めてある障子の格子戸がピツシャリ閉るのを見つけた。——その障子は、専門家の方では無窓と称するもので、普通、紙をはるべき中央の部分が、こまかい縦の二重の格子になっていて、それが開閉出来るのだ——ハテ変なこともあるものだ。古本屋などというものは、万引され易い商売だから、仮令店に番をしていなくても、奥に人がいて、障子のすきまなどから、じつと見張っているものなのに、そのすき見の箇所を塞いで了うとはおかしい、寒い時分なら兎も角、九月になつたばかりのこんな蒸し暑い晩だのに、第一あの障子が閉切つてあるのから変だ。そんな風に色々考えて見ると、古本屋の奥の間に何事かあり相で、私は目を移す気にはなれなかつた。

古本屋の細君といえ、ある時、このカフェのウエトレス達が、妙な噂をしているのを聞いたことがある。何でも、銭湯で出逢うお神さんや娘達の棚卸しの続きらしかったが、「古本屋のお神さんは、あんな綺麗な人だけれど、裸体になると、身体中傷だらけだ、叩かれたり抓られたりした痕に違いないわ。別に夫婦仲が悪くもない様だのに、おかしいわねえ」すると別の女がそれを受けて喋るのだ。「あの並びの蕎麦屋の旭屋のお神さんだ

つて、よく傷をしているわ。あれもどうも叩かれた傷に違いないわ」……で、この、噂話
が何を意味するか、私は深くも気に止めないで、ただ亭主が邪険なのだろう位に考えたこ
とだが、読者諸君、それが却々そうではなかったのだ。一寸した事柄だが、この物語全体
に大きな関係を持つていることが、後になつて分つた。

それは兎も角、そうして、私は三十分程も同じ所を見詰めていた。虫が知らすとも云
うのか、何だかこう、傍見わきみをしているすきに何事か起り相で、どうも外へ目を向けられな
かつたのだ。其時、先程一寸名前の出た明智小五郎が、いつもの荒い棒ぼうじま縞ひもの浴衣ゆかたを着て、
変に肩を振る歩き方で、窓の外を通りかかつた。彼は私に気づくと会あひ釈しゃくして中へ入つて
来たが、冷しコーヒーを命じて置いて、私と同じ様に窓の方を向いて、私の隣に腰をかけ
た。そして、私が一つの所を見詰めているのに気づくと、彼は私の視線をたどつて、
同じく向うの古本屋を眺めた。しかも、不思議なことには、彼も亦また如何にも興味ありげに、
少しも目をそらさないで、その方を凝視し出したのである。

私達は、そうして、申合せた様に同じ場所を眺めながら、色々の無駄話を取交した。そ
の時私達の間になんな話題が話されたか、今ではもう忘れてもいるし、それに、この物語
には余り関係のないことだから、略するけれど、それが、犯罪や探偵に關したものであつ

たことは確かだ。試みに見本を一つ取出して見ると、

「絶対に発見されない犯罪というのは不可能でしょうか。僕は随分可能性があると思うのですがね。例えば、谷崎潤一郎の『途上』です。ああした犯罪は先ず発見されることはありませんよ。尤も、あの小説では、探偵が発見した事になってますけれど、あれは作者のすばらしい想像力が作り出したことですからね」と明智。

「イヤ、僕はそうは思いませんよ。実際問題としてなら兎も角、理論的に云って、探偵の出来ない犯罪なんてありませんよ。唯、現在の警察に『途上』に出て来る様な偉い探偵がない丈ですよ」と私。

ざつとこう云つた風なのだ。だが、ある瞬間、二人は云い合せた様に、黙り込んで了つた。さつきから話しながらも目をそらさないでいた向うの古本屋に、ある面白い事件が発生していたのだ。

「君も気づいている様ですな」

と私が囁くと、彼は即座に答えた。

「本泥坊でしょう。どうも変ですな。僕も此処へ入って来た時から、見ていたんですよ。これで四人目ですな」

「君が来てからまだ三十分にもなりません、三十分に四人も、少しおかしいですね。僕は君の来る前からあそこを見ていたんですよ。一時間程前にね、あの障子があるでしょう。あれの格子の様になった所が、閉るのを見たんですが、それからずっと注意していたのです」

「家の人が出て行ったのじゃないのですか」

「それが、あの障子は一度も開かなかったのですよ。出て行ったとすれば裏口からでしょうが、……三十分も人がいないなんて確かに変ですよ。どうです。行って見ようじゃありませんか」

「そうですね。家の中に別状ないとしても、外で何かあったのかも知れませんがね」

私はこれが犯罪事件でもあつて呉れば面白いと思いつながらカフエを出た。明智とも同じ思いに違いなかった。彼も少からず興奮しているのだ。

古本屋はよくある型で、店全体土間になっていて、正面と左右に天井まで届く様な本棚を取付け、その腰の所が本を並べる為の台になっている。土間の中央には、島の様に、これも本を並べたり積上げたりする為の、長方形の台が置いてある。そして、正面の本棚の右の方が三尺許りばかあいていて奥の部屋との通路になり、先に云った一枚の障子が立ててあ

る。いつもは、この障子の前の半畳程の畳敷の所に、主人か、細君がチョココンと坐つて番をしているのだ。

明智と私とは、その畳敷の所まで行つて、大声に呼んで見たけれど、何の返事も無い。果して誰もいないらしい。私は障子を少し開けて、奥の間を覗いて見ると、中は電燈が消えて真暗だが、どうやら、人間らしいものが、部屋の隅に倒れている様子だ。不審に思つてもう一度声をかけたが、返事をしない。

「構わない、上つて見ようじゃありませんか」

そこで、二人はドカドカ奥の間へ上り込んで行つた。明智の手で電燈のスイッチがひねられた。そのとたん、私達は同時に「アツ」と声を立てた。明るくなつた部屋の片隅には、女の死骸が横わつてゐるのだ。

「ここの細君ですな」やつと私が云つた。「首を絞められている様ではありませんか」

明智は側へ寄つて死体を調べていたが、「とても蘇生そせいの見込はありませんよ。早く警察へ知らせなきや。僕、自動電話まで行つて来ましよう。君、番をして下さい。近所へはまだ知らせない方がいいでしょう。手掛りを消して了つてはいけないから」

彼はこう命令的に云い残して、半町許りの所にある自動電話へ飛んで行つた。

平常^{ふだん}から、犯罪だ探偵だと、議論丈は却々^{なかなか}一人前にやつてのける私だが、さて実際に打^ぶつつかつたのは初めてだ。手のつけ様がない。私は、ただ、まじまじと部屋の様子を眺めていた外はなかった。

部屋は一間切りの六畳で、奥の方は、右一間は幅の狭い縁側をへだてて、二坪許りの庭と便所があり、庭の向うは板塀になっている。——夏のこと、開けばなしだから、すっかり、見通しなのだ、——左半間は開き戸で、その奥に二畳敷程の板の間があり裏口に接して狭い流し場が見え、その腰高障子は閉っている。向って右側は、四枚の襖が閉っていて、中は二階への階段と物入場になっているらしい。ごくありふれた安長屋の間取だ。

死骸は、左側の壁寄りに、店の間の方を頭にして倒れている。私は、なるべく兇行当時の模様を乱すまいとして、一つは気味も悪かったので、死骸の側へ近寄らない様にしていた。でも、狭い部屋のことであり、見まいとしても、自然その方に目が行くのだ。女は荒い中形模様の湯衣^{ゆかた}を着て、殆ど仰向きに倒れている。併し、着物が膝の上の方までまくれて、股^{もも}がむき出しになっている位で、別に抵抗した様子はない。首の所は、よくは分らぬが、どうやら、絞^しめられた痕^{きず}が紫色になっているらしい。

表の大通りには往来が絶えない。声高に話し合つて、カラカラと日和^{ひより}下駄^{げた}を引きずつて

行くのや、酒に酔って流行唄はやりうたをどなつて行くのや、至極天下泰平なことだ。そして、障子一重の家の中には、一人の女が惨殺されて横わっている。何という皮肉だ。私は妙にセーティメンタルになつて、呆然と佇たたずんでいた。

「すぐ来る相ですよ」

明智が息を切つて歸つて来た。

「あ、そう」

私は何だか口を利くのも大儀たいぎになつていた。二人は長い間、一言も云わないで顔を見合せていた。

間もなく、一人の正服せいふくの警官が背広の男と連立つてやつて来た。正服の方は、後で知つたのだが、K警察署の司法主任で、もう一人は、その顔つきや持物でも分る様に、同じ署に属する警察医だつた。私達は司法主任に、最初からの事情を大略説明した。そして、私はこう附加えた。

「この明智君がカフェへ入つて来た時、偶然時計を見たのですが、丁度八時半頃でしたから、この障子の格子が閉つたのは、恐らく八時頃だつたと思います。その時は確か中には電燈がついてました。ですから、少くとも八時頃には、誰れか生きた人間がこの部屋にい

たことは明かです」

司法主任が私達の陳述を聞取つて、手帳に書留めている間に、警察医は一応死体の検診を済ませていた。彼は私達の言葉のとぎれるのを待つて云つた。

「絞殺ですね。手でやられたのです。これ御覧なさい。この紫色になっているのが指の痕あとです。それから、この出血しているのは爪が当たった箇所ですよ。拇おやゆび指の痕が頸くびの右側についているのを見ると、右手でやつたものですね。そうですね。恐らく死後一時間以上はたつていないでしょう。併し、無論もう蘇生そせいの見込はありません」

「上から押えつけたのですね」司法主任が考え考え云つた。「併し、それにしては、抵抗した様子がないが……恐らく非常に急激にやつたのでしようね。ひどい力で」

それから、彼は私達の方を向いて、この家の主人はどうしたのだと尋ねた。だが、無論私達が知っている筈はない。そこで、明智は氣を利かして、隣家の時計屋の主人を呼んで来た。

司法主任と時計屋の間答は大体次の様なものであつた。

「主人はどこへ行つたのかね」

「この主人は、每晚古本の夜店を出しに参りますんで、いつも十二時頃でなきや帰つて

参りません。へい」

「どこへ夜店を出すんだね」

「よく上野うえのの広小路ひろこうじへ参ります様ですが。今晚はどこへ出ましたか、どうも手前には分り兼ねますんで。へい」

「一時間ばかり前に、何か物音を聞かなかったかね」

「物音と申しますと」

「極つているじゃないか。この女が殺される時の叫び声とか、格闘の音とか……」

「別段これという物音を聞きません様でございましたが」

そうこうする内に、近所の人達が聞伝えて集つて来たのと、通りがかりの弥次馬で、古本屋の表は一杯の人ばかりになった。その中に、もう一方の、隣家の足袋屋たびやのお神さんがいて、時計屋に応援した。そして、彼女も何も物音を聞かなかった旨陳述むねした。

この間、近所の人達は、協議の上、古本屋の主人の所へ使つかいを走らせた様子だった。

そこへ、表に自動車の止る音がして、数人の人がドヤドヤと入つて来た。それは警察からの急報で駆けつけた裁判所の連中と、偶然同時に到着したK警察署長、及び当時の名探偵という噂の高かった小林刑事こばやしなどの一行だった。——無論これは後になって分つたこ

とだ、というのは、私の友達に一人の司法記者があつて、それがこの事件の係りの小林刑事とごく懇意こんいだったので、私は後日彼から色々と聞くことが出来たのだ。——先着の司法主任は、この人達の前で今までの模様を説明した。私達も先の陳述をもう一度繰返さねばならなかつた。

「表の戸を閉めましょう」

突然、黒いアルパカの上衣に、白ズボンという、下廻りの会社員見たいな男が、大声でどなつて、さつさと戸を閉め出した。これが小林刑事だった。彼はこうして弥次馬を撃退して置いて、さて探偵にとりかかつた。彼のやり方は如何にも傍若無人で、検事や署長などはまるで眼中にない様子だった。彼は始めから終りまで一人で活動した。他の人達は唯彼の敏びんしやう捷な行動を傍観する為にやつて来た見物人に過ぎない様に見えた。彼は第一に死体を検べた。頸の廻りは殊に念入りにいじり廻していたが、

「この指の痕には別に特徴がありません。つまり普通の人間が、右手で押えつけたという以外に何の手掛りもありません」

と検事の方を見て云つた。次に彼は一度死体を裸体にして見るといい出した。そこで、議会の秘密会見たいに、傍聴者の私達は、店の間へ追出されねばならなかつた。だから、

その間にどういう発見があったか、よく分らないが、察する所、彼等は死人の身体に沢山の生傷のあることに注意したに相違ない。カフェのウエトレスの噂していたあれだ。

やがて、この秘密会が解かれたけれど、私達は奥の間へ入って行くのを遠慮して、例の店の間と奥との境の畳敷の所から奥の方を覗き込んでいた。幸なことには、私達は事件の発見者だったし、それに、後から明智の指紋をとらねばならなかった為に、最後まで追出されずに済んだ。というよりは抑留よくりゆうされていたという方が正しいかも知れぬ。併し小林刑事の活動は奥の間丈に限られていた訳でなく、屋内屋外の広い範囲に互わたっていたのだから、一つ所にじつとしていた私達に、その捜査の模様が分ろう筈がないのだが、うまい工合に、検事が奥の間に陣取っていて、始終殆ど動かなかったもので、刑事が出たり入ったりする毎に、一々捜査の結果を報告するのを、洩れなく聞きとることが出来た。検事はその報告に基いて、調書の材料を書記に書きとめさしていた。

先ず、死体のあつた奥の間の捜索が行われたが、遺留品も、足跡も、その他探偵の目に触れる何物もなかった様子だ。ただ一つのものを除いては。

「電燈のスイッチに指紋があります」黒いエボナイトのスイッチに何か白い粉をふりかけていた刑事が云った。「前後の事情から考えて、電燈を消したのは犯人に相違ありません。

併しこれをつけたのはあなた方のうちどちらですか」

明智は自分だと答えた。

「そうですか。あとであなたの指紋をとらせて下さい。この電燈は触らない様にして、このまま取はずして持つて行きましょう」

それから、刑事は二階へ上つて行つて暫く下りて来なかつたが、下りて来るとすぐに路地を検べるのだといつて出て行つた。それが十分もかかつたらうか、やがて、彼はまだついたままの懐中電燈を片手に、一人の男を連れて歸つて来た。それは汚れたクレツプシャツにカーキ色のズボンという扮装^{いでたち}で、四十許^{ばか}りの汚い男だ。

「足跡はまるで駄目です」刑事が報告した。「この裏口の辺は、日当りが悪いせいかひどいぬかるみで、下駄の跡が滅多無性についているんだから、逆^{とて}も分りっこありません。ところで、この男ですが」と今連れて来た男を指し「これは、この裏の路地を出た所の角に店を出していたアイスクリーム屋ですが、若し犯人が裏口から逃げたとすれば、路地は一方口なんですから、必ずこの男の目についた筈です。君、もう一度私の尋ねることに答えて御覧」

そこで、アイスクリーム屋と刑事の間答。

「今晚八時前後に、この路地を出入でいりしたものはないかね」

「一人もありませんので、日が暮れてからこつち、猫の子一匹通りませんので」アイスクリーム屋は却々要領よく答える。

「私は長らくここへ店を出させて貰つてますが、あすこは、この長屋のお上さん達も、夜分は滅多に通りませんので、何分あの足場の悪い所へ持つて来て、真暗なんですから」

「君の店のお客で路地の中へ入つたものはないかね」

「それも御座いません。皆さん私の目の前でアイスクリームを食べて、すぐ元の方へ御帰りになりました。それはもう間違いはありません」

さて、若しこのアイスクリーム屋の証言が信用すべきものだとすると、犯人は仮令この家の裏口から逃げたとしても、その裏口からの唯一の通路である路地は出なかつたことになる。さればと云つて、表の方から出なかつたことも、私達が白梅軒から見ていたのだから間違いはない。では彼は一体どうしたのであるう。小林刑事の考えによれば、これは、犯人がこの路地を取りまいてゐる裏表二側の長屋の、どこかの家に潜伏しているか、それとも借家人の内に犯人があるのかどちらかであろう。尤も二階から屋根伝いに逃げる路はあるけれど、二階を検べた所によると、表の方の窓は取りつけの格子が嵌はまつていて少しも

動かした様子はないのだし、裏の方の窓だって、この暑さでは、どこの家も二階は明けっぱなしで、中には物干で涼んでいる人もある位だから、ここから逃げるのは一寸難しい様に思われる。とこういうのだ。

そこで臨検者達の間、一寸捜査方針についての協議が開かれたが、結局、手分けをして近所を軒並に検べて見る事になった。といっても、裏表の長屋を合せて十一軒しかないのだから、大して面倒ではない。それと同時に家の中も再度、縁の下から天井裏まで残る隈なく検べられた。ところがその結果は、何の得る処うもなかったばかりでなく、却つて事情を困難にしてしまった様に見えた。というのは、古本屋の一軒置いて隣の菓子屋の主人が、日暮れ時分からつい今し方まで屋上の物干へ出て尺八を吹いていたことが分つたが、彼は始めから終いまで、丁度古本屋の二階の窓の出来事を見逃す筈のない様な位置に坐っていたのだ。

読者諸君、事件は却々面白くなつて来た。犯人はどこから入つて、どこから逃げたのか、裏口からでもない、二階の窓からでもない、そして表からでは勿論ない。彼は最初から存在しなかつたのか、それとも煙の様に消えて了つたのか。不思議はそればかりでない。小林刑事が、検事の前に連れて来た二人の学生が、実に妙なことを申立てたのだ。それは裏

側の長屋に間借りしている、ある工業学校の生徒達で、二人共出鱈目でたらめを云う様な男とも見えぬが、それにも拘かかわらず、彼等の陳述は、この事件を益々不可解にする様な性質のものであったのである。

検事の質問に対して、彼等は大体左さの様に答えた。

「僕は丁度八時頃に、この古本屋の前に立つて、その台にある雑誌を開いて見ていたのです。すると、奥の方で何だか物音がしたもんですから、ふと目を上げてこの障子の方を見ますと、障子は閉まっていましたけれど、この格子の様になった所が開いてましたので、そのすき間に一人の男の立っているのが見えました。しかし、私が目を上げるのと、その男が、この格子を閉めるのと殆ど同時でしたから、詳しいことは無論分りませんが、でも、帯ぐあいの工合で男だったことは確かです」

「で、男だったという外に何か気附いた点はありませんか、背恰好とか、着物の柄とか」「見えたのは腰から下ですから、背恰好は一寸分りませんが、着物は黒いものでした。ひよつとしたら、細い縞かすりか縞かすりであったかも知れませんが、私の目には黒無地に見えました」

「僕もこの友達と一緒に本を見ていたんです」ともう一方の学生、「そして、同じ様に物

音に気づいて同じ様に格子の閉るのを見ました。ですが、その男は確かに白い着物を着ていました。縞も模様もない、真白な着物です」

「それは変ではありませんか。君達の内どちらかが間違いでなけりや」

「決して間違いではありません」

「僕も嘘は云いません」

この二人の学生の不思議な陳述は何を意味するか、鋭敏な読者は恐らくあることに気づかれたであろう。実は、私もそれに気附いたのだ。併し、裁判所や警察の人達は、この点について、余りに深く考えない様子だった。

間もなく、死人の夫の古本屋が、知らせを聞いて帰って来た。彼は古本屋らしくない、きやしやな、若い男だったが、細君の死骸を見ると、気の弱い性質たちと見えて、声こそ出さないけれど、涙をぼろぼろこぼ零していた。小林刑事は、彼が落着くのを待って、質問を始めた。検事も口を添えた。だが、彼等の失望したことは、主人は全然犯人の心当りが無いというのだ。彼は「これに限って、人様に怨みを受ける様なものではございません」といつて泣くのだ。それに、彼が色々調べた結果、物どりの仕業でないことも確かめられた。そこで、主人の経歴、細君の身許みもと其他様々の取調べがあったけれど、それらは別段疑うべき点

もなく、この話の筋に大した関係もないので略することにする。最後に死人の身体にある多くの生傷について刑事の質問があった。主人は非常に躊躇ちゆうちよして居ったが、やっと自分がつけたのだと答えた。ところが、その理由については、くどく訊ねられたにも拘らず、余り明白な答は与えなかった。併し、彼はその夜ずっと夜店を出していたことが分つてゐるのだから、仮令それが虐待の傷痕だったとしても、殺害の疑いはかからぬ筈だ。刑事もそう思つたのか、深く穿鑿せんさくしなかった。

そうして、その夜の取調べは一先ず終つた。私達は住所姓名などを書留められ、明智は指紋をとられて、帰途についたのは、もう一時を過ぎていた。

若し警察の搜索に手抜かりがなく、又証人達も嘘を云わなかったとすれば、これは実に不可解な事件であつた。しかも、後で分つた所によると、翌日から引続いて行われた、小林刑事のあらゆる取調べも何の甲斐もなく、事件は發生の当夜のまま少しだつて發展しなかつたのだ。証人達は凡て信頼するに足る人々だつた。十一軒の長屋の住人にも疑うべき所はなかつた。被害者の国許も取調べられたけれど、これ亦、何の変つた事もない。少くとも、小林刑事——彼は先にも云つた通り、名探偵と噂されている人だ——が、全力を尽して搜索した限りでは、この事件は全然不可解と結論する外はなかつた。これもあとで

聞いたのだが、小林刑事が唯一の証拠品として、頼みをかけて持帰った例の電燈のスイッチにも、落胆したことには、明智の指紋の外何物も発見することが出来なかった。明智はあの際で慌てていたせいか、そこには沢山の指紋が印せられていたが、凡て彼自身のものだった。恐らく、明智の指紋が犯人のそれを消して了ったのだろうと、刑事は判断した。

読者諸君、諸君はこの話を読んで、ポオの「モルグ街の殺人」やドイルの「スペックル・バンド」を聯想れんそうされはしないだろうか。つまり、この殺人事件の犯人は、人間でなくて、オランウータンとか、印度インドの毒蛇だとかいうような種類のものだと想像されはしないだろうか。私も実はそれを考えたのだ。併し、東京のD坂あたりにそんなものが居るとも思われぬし、第一障子のすき間から、男の姿を見たという証人がある。のみならず、猿類などだったら、足跡の残らぬ筈はなく、又人目にもついた筈だ。そして、死人の頸にあつた指の痕も、正に人間のそれだ。蛇がまきついたとて、あんな痕は残らぬ。それは兎も角、明智と私とは、その夜帰途につきながら、非常に興奮して色々話合ったものだ。一例を上げると、まあこんな風なことを。

「君はポオの『ル・モルグ』やルルーの『黄色の部屋』などの材料になった、あのパリーのRose Delacourt事件を知っているでしょう。百年以上たった今日でも、まだ謎として残

っているあの不思議な殺人事件を。僕はあれを思出したのですよ。今夜の事件も犯人の立去った跡のない所は、どうやら、あれに似ているではありませんか」と明智。

「そうですね。実に不思議ですね。よく、日本の建築では、外国の探偵小説にある様な深刻な犯罪は起らないなんて云いますが、僕は決してそうじゃないと思いますよ。現にこうした事件もあるのですからね。僕は何だか、出来るか出来ないか分かりませんが、一つこの事件を探偵して見たい様な気がしますよ」

そうして、私達はある横町で分れを告げた。其時私は、横町を曲って、彼一流の肩を振る歩き方で、さつさと帰って行く明智の後姿が、その派手な棒縞の浴衣によって暗やみの中にくつきりと浮出して見えたのを覚えている。

(下) 推理

さて、殺人事件から十日程たったある日、私は明智小五郎の宿を訪ねた。その十日の間に、明智と私とが、この事件に関して、何を為し、何を考えそして何を結論したか。読者は、それらを、この日、彼と私との間に取交された会話によって、十分察することが出来

るであろう。

それまで、明智とはカフェで顔を合していたばかりで、宿を訪ねるのは、その時が始めてだったけれど、予て所を聞いていたので、探すのに骨は折れなかった。私は、それらしい煙草屋の店先に立つて、お上さんに、明智がいるかどうかを尋ねた。

「エエ、いらつしやいます。一寸御待ち下さい、今お呼びしますから」

彼女はそういつて、店先から見えている階段の上り口まで行って、大声に明智を呼んだ。彼はこの家の二階を間借りしているのだ。すると、

「オー」

と変な返事をして、明智はミシミシと階段を下りて来たが、私を発見すると、驚いた顔をして「ヤー、御上りなさい」といった。私は彼の後に従つて二階へ上った。ところが、何気なく、彼の部屋へ一歩足を踏み込んだ時、私はアツと魂消たまげてしまった。部屋の様子が余りにも異様だったからだ。明智が変り者だということを知らぬではなかったけれど、これは又変り過ぎていた。

何のことはない、四畳半の座敷が書物で埋まっているのだ。真中の所に少し畳が見える丈で、あとは本の山だ、四方の壁や襖に沿つて、下の方は殆ど部屋一杯に、上の方程幅

が狭くなって、天井の近くまで、四方から書物の土手が迫っているのだ。外の道具などは何も無い。一体彼はこの部屋でどうして寝るのだろうと疑われる程だ。第一、主客二人の坐る所もない、うっかり身動きし様ものなら、忽ち本の土手くずれで、押しつぶされて了うかも知れない。

「どうも狭くついていけません、それに、座蒲団ざぶとんがないのです。済みませんが、柔か相な本の上へでも坐つて下さい」

私は書物の山に分け入って、やっと坐る場所を見つけたが、あまりのことに、暫く、ぼんやりとその辺あたりを見廻していた。

私は、かくも風変りな部屋の主である明智小五郎の為ひととなり人について、ここで一応説明して置かねばなるまい。併し彼とは昨今のつき合いだから、彼がどういう経歴の男で、何によって衣食し、何を目的にこの人世を送っているのか、という様なことは一切分らぬけれど、彼が、これという職業を持たぬ一種の遊民であることは確かだ。強しいて云えば書生であろうか、だが、書生にしては余程風変りな書生だ。いつか彼が「僕は人間を研究しているんですよ」といったことがあるが、其時私には、それが何を意味するのかよく分らなかった。唯、分っているのは、彼が犯罪や探偵について、並々ならぬ興味と、恐るべく豊

富な知識を持っていることだ。

年は私と同じ位で、二十五歳を越してはいまい。どちらかと云えば瘦せた方で、先にも云った通り、歩く時に変に肩を振る癖がある、といつても、決して豪傑流のそれではなく、妙な男を引合いに出すが、あの片腕の不自由な、講釈師の神田伯龍を思出させる様な歩き方なのだ。伯龍といえ、明智は顔つきから声音まで、彼にそっくりだ、——伯龍を見たことのない読者は、諸君の知っている内で、所謂好男子ではないが、どことなく愛嬌のある、そして最も天才的な顔を想像するがよい——ただ明智の方は、髪の毛がもつと長く延びていて、モジャモジャともつれ合っている。そして、彼は人と話している間にもよく、指で、そのモジャモジャになっている髪の毛を、更らにモジャモジャにする為の様に引搔廻すのが癖だ。服装などは一向構わぬ方らしく、いつも木綿の着物に、よれよれの兵児帯を締めている。

「よく訪ねて呉れましたね。その後暫く逢いませんが、例のD坂の事件はどうです。警察の方では一向犯人の見込がつかぬようではありませんか」

明智は例の、頭を搔廻しながら、ジロジロ私の顔を眺めて云う。

「実は僕、今日はそのことで少し話があつて来たんですがね」そこで私はどういふ風に切

り出したものかと迷いながら始めた。

「僕はあれから、種々考えて見たんですよ。考えたばかりでなく、探偵の様に実地の取調べもやったのですよ。そして、実は一つの結論に達したのです。それを君に御報告しようと思つて……」

「ホウ。そいつはすてきですね。詳しく聞き度いものですね」

私は、そういう彼の目付に、何が分るものかという様な、軽蔑と安心の色が浮んでいるのを見逃さなかつた。そして、それが私の逡巡している心を激励した。私は勢いきおい込んで話し始めた。

「僕の友達に一人の新聞記者がありましたね、それが、例の事件の係りの小林刑事ということと懇意なのです。で、僕はその新聞記者を通じて、警察の模様を詳しく知ることが出来ました。警察ではどうも捜査方針が立たないらしいのです。無論種々いろいろ活動はしているのですが、これという見込がつかぬのです。あの、例の電燈のスイッチですね。あれも駄目なんです。あすこには、君の指紋丈けつきやついていないことが分つたのです。警察の考えでは、多分君の指紋が犯人の指紋を隠して了つたのだというのですよ。そういう訳で、警察が困つていることを知つたものですから、僕は一層熱心に調べて見る氣になりました。

そこで、僕が到達した結論というのは、どんなものだと思います、そして、それを警察へ訴える前に、君の所へ話しに来たのは何の為だと思います。

それは兎も角、僕はあの事件のあった日から、あることを気づいていたのですよ。君は覚えているでしょう。二人の学生が犯人らしい男の着物の色について、まるで違った申立てをしたことをね。一人は黒だといい、一人は白だと云うのです。いくら人間の目が不確かだといって、正反対の黒と白とを間違えるのは変じやないですか。警察ではあれをどんな風に解釈したか知りませんが、僕は二人の陳述は両方とも間違えないと思うのですよ。君、分りますか。あれはね、犯人が白と黒とのんだららの着物を着ていたんですよ。……つまり、太い黒の棒縞の浴衣なんかです。よく宿屋の貸浴衣にある様な……では何故それが一人に真白に見え、もう一人には真黒に見えたかといいますと、彼等は障子の格子のすき間から見たのですから、丁度その瞬間、一人の目が格子のすき間と着物の白地の部分と一致して見える位置にあり、もう一人の目が黒地の部分と一致して見える位置にあったんです。これは珍らしい偶然かも知れませんが、決して不可能ではないのです。そして、この場合こう考えるより外に方法がないのです。

さて、犯人の着物の縞柄は分りましたが、これでは単に捜査範囲が縮小されたという迄

で、まだ確定的なものではありません。第二の論拠は、あの電燈のスイッチの指紋なんです。僕は、さつき話した新聞記者の友達の手で、小林刑事に頼んでその指紋を——君の指紋ですよ——よく調べさせて貰ったのです。その結果愈々僕の考えてることが間違っていないのを確めました。ところで、君、硯すずりがあつたら、一寸貸して呉れませんか」

そこで、私は一つの実験をやつて見せた。先ず硯を借りる、私は右の拇指に薄く墨をつけて、懐から半紙の上に一つの指紋を捺した。それから、その指紋の乾くのを待つて、もう一度同じ指に墨をつけ前の指紋の上から、今度は指の方向を換えて念入りに押えつけた。すると、そこには互に交錯した二重の指紋がハッキリ現れた。

「警察では、君の指紋が犯人の指紋の上に重つて、それを消して了つたのだと解釈しているのですが、併しそれは今の実験でも分る通り不可能なんですよ。いくら強く押した所で、指紋というものが線で出来ている以上、線と線との間に、前の指紋の跡が残る筈です。もし前後の指紋が全く同じもので、捺し方も寸分違わなかつたとすれば、指紋の各線が一致しますから、或は後の指紋が先の指紋を隠して了うことも出来るでしょうが、そういうことは先ずあり得ませんし、仮令そうだとしても、この場合結論は変わらないのです。

併し、あの電燈を消したのが犯人だとすれば、スイッチにその指紋が残っていなければ

なりません。僕は若しや警察では君の指紋の線と線との間に残っている先の指紋を見落しているのではないかと思つて、自分で調べて見たのですが、少しもそんな痕跡がないのです。つまり、あのスイッチには、後にも先にも、君の指紋が捺されているだけなのです。——どうして古本屋の人達の指紋が残つていなかったのか、それはよく分りませんが、多分、あの部屋の電燈はつけっぱなしで、一度も消したことがないのでしよう。

君、以上の事柄は一体何を語つているでしょう。僕はこういう風に考えるのですよ。一人の荒い棒縞の着物を着た男が、——その男は多分死んだ女の幼馴染で、失恋という理由なんかも考えられますね——古本屋の主人が夜店を出すことを知つていてその留守の間に女を襲うたのです。声を立てたり抵抗したりした形跡がないのですから、女はその男をよく知つていたに相違ありません。で、まんまと目的を果した男は、死骸の発見を後らす為に、電燈を消して立去つたのです。併し、この男の一期いちごの不覚は、障子の格子のあいているのを知らなかつたこと、そして、驚いてそれを閉めた時に、偶然店先にいた二人の学生に姿を見られたことでした。それから、男は一旦外へ出ましたが、ふと気がついたのは、電燈を消した時、スイッチに指紋が残つたに相違ないということです。これはどうしても消してはわねばなりません。然しもう一度同じ方法で部屋の中へ忍込むのは危険です。そ

こで、男は一つの妙案を思いつきました。それは、自から殺人事件の発見者になることです。そうすれば、少しも不自然もなく、自分の手で電燈をつけて、以前の指紋に対する疑をなくして了うことが出来るばかりでなく、まさか、発見者が犯人だろうとは誰しも考えませんからね、二重の利益があるのです。こうして、彼は何食わぬ顔で警察のやり方を見ていたのです。大胆にも証言さえました。しかも、その結果は彼の思う壺だったのですよ。五日たつても十日たつても、誰も彼を捕えに来るものはなかったのですからね」

この私の話を、明智小五郎はどんな表情で聴いていたか。私は、恐らく話の途中で、何か変った表情をするか、言葉を挟むだろうと予期していた。ところが、驚いたことには、彼の顔には何の表情も現れぬのだ。一体平素から心を色に現さぬ質^{たち}ではあつたけれど、余り平気すぎる。彼は始終例の髪の毛をモジャモジャやりながら、黙り込んでいるのだ。私は、どこまでずうずうしい男だろうと思ひながら最後の点に話を進めた。

「君はきつと、それじゃ、その犯人はどこから入つて、どこから逃げたかと反問するでしょう。確に、その点が明かにならなければ、他の凡てのことが分つても何の甲斐もないのですからね。だが、遺憾^{いかん}ながら、それも僕が探り出したのですよ。あの晩の捜査の結果では、全然犯人の出て行つた形跡がない様に見えました。併し、殺人があつた以上、犯人が

出入しなかった筈はないのですから、刑事の捜索にどこか抜目があったと考える外はありません。警察でもそれには随分苦心した様子ですが、不幸にして、彼等は、僕という一介の書生に及ばなかったのですよ。

ナア二、実は下らぬ事なんですがね、僕はこう思ったのです。これ程警察が取調べているのだから、近所の人達に疑うべき点は先ずあるまい。もしそうだとすれば、犯人は、何か、人の目にふれても、それが犯人だとは気づかれぬ様な方法で通つたのじゃないだろうか、そして、それを目撃した人はあつても、まるで問題にしなかつたのではなからうかとね。つまり、人間の注意力の盲点——我々の目に盲点があると同じ様に、注意力にもそれがありますよ——を利用して、手品使が見物の目の前で、大きな品物を訳もなく隠す様に、自分自身を隠したのかも知れませんかね。そこで、僕が目をつけたのは、あの古本屋の一軒置いて隣の旭屋という蕎麦屋です」

古本屋の右へ時計屋、菓子屋と並び、左へ足袋屋、蕎麦屋と並んでいるのだ。

「僕はあそこへ行つて、事件の当夜八時頃に、便所を借りて行つた男はないかと聞いて見ただけです。あの旭屋は君も知っているでしょうが、店から土間続きで、裏木戸まで行ける様になつていて、その裏木戸のすぐ側に便所があるので、便所を借りる様に見せか

けて、裏口から出て行つて、又入つて来るのは訳はありませんからね。——例のアイスクリーム屋は路地を出た角に店を出していたのですから、見つかる筈はありません——それに、相手が蕎麦屋ですから、便所を借りるといふことが極めて自然なんです。聞けば、あの晩はお上さんは不在で、主人丈が店の間にいた相ですから、おあつらえ向きなんです。君、なんとすてきな、思おもい附つきではありませんか。

そして、案の定、丁度その時分に便所を借りた客があつたのです。ただ、残念なことには、旭屋の主人は、その男の顔形とか着物の縞柄などを少しも覚えていないのですがね。

——僕は早速この事を例の友達を通じて、小林刑事に知らせてやりましたよ。刑事は自分でも蕎麦屋を調べた様でしたが、それ以上何も分らなかつたのです——」

私は少し言葉を切つて、明智に発言の余裕を与えた。彼の立場は、この際何とか一言云わないでいられぬ筈だ。ところが、彼は相変らず頭を搔廻しながら、すまし込んでいるのだ。私はこれまで、敬意を表する意味で間接法を用いていたのを直接法に改めねばならなかつた。

「君、明智君、僕のいう意味が分るでしょう。動かぬ証拠が君を指さしているのですよ。白状すると、僕はまだ心の底では、どうしても君を疑う気になれないのですが、こういう

風に証拠が揃っていては、どうも仕方がありません。……僕は、もしやあの長屋の内に、太い棒縞の浴衣を持つている人がないかと思つて、随分骨を折つて調べて見ましたが、一人もありません。それも尤ももつとですよ。同じ棒縞の浴衣でも、あの格子に一致する様な派手なのを着る人は珍らしいのですからね。それに、指紋のトリックにしても、便所を借りるというトリックにしても、実に巧妙で、君の様な犯罪学者でなければ、一寸真似の出来な芸当ですよ。それから、第一おかしいのは、君はあの死人の細君と幼馴染だといつていながら、あの晩、細君の身許調べなんかあつた時に、側で聞いていて、少しもそれを申立てなかつたではありませんか。

さて、そうなると唯一の頼みはAlibiの有無です。ところが、それも駄目なんです。君は覚えていますか、あの晩帰り途中で、白梅軒へ来るまで君が何処どこにいたかということ、僕は聞きましたね。君は一時間程、その辺を散歩していたと答えたでしょう。仮令、君の散歩姿を見た人があつたとしても、散歩の途中で、蕎麦屋の便所を借りるなどはあり勝ちなことですからね。明智君、僕のことを間違つていますか。どうです。もし出来るなら君の弁明を聞こうじゃありませんか」

読者諸君、私がこういつて詰めよつた時、奇人明智小五郎は何をしたと思います。面目

なさに俯伏して了つたとも思うのですか。どうしてどうして、彼はまるで意表外のやり方で、私の荒胆あらぎもをひしいだのです。というのは、彼はいきなりゲラゲラと笑い出したのです。

「いや失敬失敬、決して笑うつもりではなかったのですけれど、君は余り真面目だもんだから」明智は弁解する様に云つた。「君の考えは却々なかなか面白いですよ。僕は君の様な友達を見つけたことを嬉しく思いますよ。併し、惜しいことには、君の推理は余りに外面的で、そして物質的ですよ。例えばですね。僕とあの女との関係についても、君は、僕達がどんな風な幼馴染だったかということ、内面的に心理的に調べて見ましたか。僕が以前あの女と恋愛関係があつたかどうか。又現に彼女を恨うらんでいるかどうか。君にはそれ位のこと
が推察出来なかつたのですか。あの晩、なぜ彼女を知っていることを云わなかつたか、その訳は簡単ですよ。僕は何も参考になる様な事柄を知らなかつたのです。僕は、まだ小学校へも入らぬ時分に彼女と分れた切りなのですからね。尤も、最近偶然そのことが分つて、二三度話し合つたことはありませんけれど」

「では、例えば指紋のことはどういう風に考えたらいいのですか？」

「君は、僕があれから何もしていないでいたと思うのですか。僕もこれで却々やつたですよ。」

D坂は毎日の様にうろついていましたよ。殊に古本屋へはよく行きました。そして主人をつかまえて色々探ったのです。——細君を知っていたことはその時打明けたのですが、それが却^{かえ}つて便宜になりましたよ——君が新聞記者を通じて警察の模様を知った様に、僕はあの古本屋の主人から、それを聞出していたんです。今の指紋のことも、じきに分りましたから、僕も妙に思つて検^{しら}べて見たのですが、ハハ……、笑い話ですよ。電球の線が切れていたのです。誰も消しやしなかつたのですよ。僕がスイッチをひねつた為に燈^ひがついたと思つたのは間違で、あの時、慌てて電燈を動かしたので、一度切れたタングステンが、つながつたのですよ。スイッチに僕の指紋丈けしかなかつたのは、当りまえなのです。あの晩、君は障子のすき間から電燈のついているのを見たと言いましたね。とすれば、電球の切れたのは、その後ですよ。古い電球は、どうもしないでも、独りでに切れることがありますからね。それから、犯人の着物の色のことですが、これは僕が説明するよりも……」

彼はそういつて、彼の身辺の書物の山を、あちらこちらを掘り掘りしていたが、やがて、一冊の古ぼけた洋書を掘りだして来た。

「君、これを読んだことがありますか、ミュンスターベルヒの『心理学と犯罪』という本ですが、この『錯覚』という章の冒頭を十行許^{ばか}り読んで御覧なさい」

私は、彼の自信ありげな議論を聞いている内に、段々私自身の失敗を意識し始めていた。云われるままにその書物を受取つて、読んで見た。そこには大体次の様なことが書いてあった。

嘗つて一つの自動車犯罪事件があつた。法廷に於て、真実を申立てる旨宣誓した証人の一人は、問題の道路は全然乾燥してほり立つていたと主張し、今一人の証人は、雨降りの拳句で、道路はぬかるんでいたと誓言した。一人は、問題の自動車は徐行していたともいい、他の一人は、あの様に早く走っている自動車を見たことがないと述べた。又前者は、その村道には二三人しか居なかつたといい、後者は、男や女や子供の通行人が沢山あつたと陳述した。この兩人の証人は、共に尊敬すべき紳士で、事実を曲弁したとて、何の利益がある筈もない人々だつた。

私がそれを読み終るのを待つて明智は更らに本の頁を繰りながら云つた。

「これは実際あつたことですが、今度は、この『証人の記憶』という章があるでしょう。その中程の所に、あらかじめ予め計画して実験した話があるのですよ。丁度着物の色のことが出てま

すから、面倒でしようが、まあ一寸読んで御覧なさい」
それは左の様な記事であつた。

(前略) 一例を上げるならば、一昨年(この書物の出版は一九一一年)ゲッティンゲンに於て、法律家、心理学者及び物理学者よりなる、ある学術上の集會が催されたことがある。^{したが}随つて、そこに集つたのは、皆、綿密な觀察に熟練した人達ばかりであつた。その町には、恰もカーニバルの御祭騒ぎが演じられていたが、突然、この学究的な會合の最中に、戸が開かれてけばけばしい衣裳をつけた一人の道化が、狂氣の様に飛び込んで来た。見ると、その後から一人の黒人が手にピストルを持って追駆けて来るのだ。ホールの真中で、彼等はかたみがわりに、恐ろしい言葉をどなり合つたが、やがて道化の方がバツタリ床に倒れると、黒人はその上に躍りかかった。そして、ポンとピストルの音がした。と、忽ち彼等は二人共、かき消す様に室を出て行つて了つた。全体の出来事が二十秒とはかからなかつた。人々は無論非常に驚かされた。座長の外には、誰一人、それらの言葉や動作が、予め予習されていたこと、その光景が写真に撮られたことなどを悟つたものはなかつた。で、座長が、これはいづれ法廷に持

出される問題だからというので、会員各自に正確な記録を書くことを頼んだのは、極く自然に見えた。（中略、この間に、彼等の記録が如何に間違に充ちていたかを、パーセンテージを示して記してある）黒人が頭に何も冠っていなかったことを云い当てたのは、四十人の内でたった四人切りで、外の人達は山高帽子を冠っていたと書いたものもあれば、シルクハットだったと書くものもあるという有様だった。着物についても、ある者は赤だといい、あるものは茶色だといい、ある者は縞だといい、あるものはコーヒ色だといい、其他種々様々の色合が彼の為に説明せられた。ところが、黒人は実際は、白ズボンに黒の上衣を着て、大きな赤のネクタイを結んでいたのだ。

（後略）

「ミュンスターベルヒが賢くも説破した通り」と明智は始めた。「人間の観察や人間の記憶なんて、実にたよらないものですよ。この例にある様な学者達でさえ、服の色の見分がつかなかったのです。私が、あの晩の学生達は着物の色を見違えたと考えるのが無理でしょう。彼等は何者かを見たかも知れませんが、併しその者は棒縞の着物なんか着ていなかった筈です。無論僕ではなかったのです。格子のすき間から、棒縞の浴衣を思付いた君の

着眼は、却々面白いには面白いですが、あまりおあつらえむ詭向あつらえむきすぎるじゃありませんか。少くとも、そんな偶然の符合を信ずるよりは、君は、僕の潔白を信じて呉れる訳には行かぬでしょうか。さて最後に、蕎麦屋の便所を借りた男のことですがね。この点は僕も君と同じ考だったのです。どうも、あの旭屋の外に犯人の通路はないと思つたのですよ。で僕もあすこへ行つて調べて見ましたが、その結果は、残念ながら、君と正反対の結論に達したのです。実際は便所を借りた男なんてなかつたのですよ」

読者も已すでに気づかれたであろうが、明智はこうして、証人の申立てを否定し、犯人の指紋を否定し、犯人の通路をさえ否定して、自分の無罪を証拠立てようとしているが、併しそれは同時に、犯罪そのものを否定することになりはしないか。私は彼が何を考えているのか少しも分らなかつた。

「で、君は犯人の見当がついているのですか」

「ついていきますよ」彼は頭をモジャモジャやりながら答えた。「僕のやり方は、君とは少し違うのです。物質的な証拠なんてものは、解釈の仕方でもなるものですよ。一番いい探偵法は、心理的に人の心の奥底を見抜くことです。だが、これは探偵者自身の能力の問題ですがね。兎も角、僕は今度はそういう方面に重きを置いてやってみましたよ。」

最初僕の注意を惹いたのは、古本屋の細君の身体中にある生傷のあったことです。それから間もなく、僕は蕎麦屋の細君の身体にも同じ様な生傷があることを聞込みました。これは君も知っているでしょう。併し、彼女等の夫は、そんな乱暴者でもなさそうです。古本屋にしても蕎麦屋にしても、おとなし相な、物分りのいい男なんですからね。僕は何となく、そこにある秘密が伏在しているのではないかと疑わないではいられなかったのです。僕は先ず古本屋の主人を捉えて、彼の口からその秘密を探り出そうとしました。僕が死んだ細君の知合だというので、彼もいくらか気を許していましたから、それは比較的楽に行きました。そして、ある変な事実を聞出すことが出来たのです。ところが、今度は蕎麦屋の主人ですが、彼は、ああ見えても却々しつかりした男ですから、探り出すのに可成かなり骨が折れましたよ。でも、僕はある方法によって、うまく成功したのです。

君は、心理学上の聯想診断法が、犯罪捜査の方面にも利用され始めたのを知っているでしょう。沢山の簡単な刺戟語を与えて、それに対する嫌疑者の觀念聯合の遲速を計る、あの方法です。併し、あれは必ずしも、心理学者の云う様に、犬だとか家だとか川だとか、簡単な刺戟語には限らないし、そして又、常にクロノスコープの助けを借りる必要もないと、僕は思いますよ。聯想診断の骨こっを悟ったものにとっては、その様な形式は大した必要

ではないのです。それが証拠に、昔の名判官めいはんがんとか名探偵とかいわれる人は心理学が今日のように発達しない以前から、唯彼等の天稟てんびんによつて、知らず識らずしの間に、この心理的方法を實行していたではありませんか。大岡越前守おおおかえちぜんのかみなども確かにその一人ですよ。小説で云えば、ポオの『ル・モルグ』の始めに、デュパンが友達の身体の動き方一つによつて、その心に思つてゐることを云い当てる所がありますね。ドイルもそれを真似て、『レジデント・ペーシエント』の中で、ホームズに同じ様な推理をやらせますが、これらは皆、ある意味の聯想診断ですからね。心理学者の種々の機械的方法は、唯こうした天稟の洞察力を持たぬ凡人の為に作られたものに過ぎませんよ。話が傍路わきみちに入りましたが、僕はそういう意味で、蕎麦屋の主人に対して、一種の聯想診断をやつたのです。僕は彼に色々の話をしかけました。それも極くつまらない世間話をね。そして、彼の心理的反應を研究したのです。併し、これは非常にデリケートな心持の問題で、それに可成複雑してますから、詳しいことはいずれゆっくり話すとして、兎も角その結果、僕は一つの確信に到達しました。つまり犯人を見つけたのです。

併し物質的の証拠というものは一つもないのです。だから、警察に訴える訳にも行きません。よし訴えても、恐らく取上げて呉れないでしょう。それに、僕が犯人を知りながら、

手を束ねて見ているもう一つの理由は、この犯罪には少しも悪意がなかったという点です。変な云い方ですが、この殺人事件は、犯人と被害者と同意の上で行われたのです。いや、ひよつとしたら被害者自身の希望によって行われたのかも知れませんが」

私は色々想像をめぐらして見たけれど、どうにも彼の考えていることが分り兼ねた。私自身の失敗を恥じることを忘れて、彼のこの奇怪な推理に耳を傾けた。

「で、僕の考を云いますとね、殺人者は旭屋の主人なのです。彼は罪跡をくらます為にあんな便所を借りた男のことを云ったのですよ。いや、併しそれは何も彼の創案でも何でもない。我々が悪いのです。君にしる僕にしる、そういう男がなかったかと、こちらから問を構えて、彼を教唆した様なものですからね。それに、彼は僕達を刑事かなんかと思違えていたのです。では、彼は何故に殺人罪を犯したか。……僕はこの事件によって、うわべは極めて何気なき相な、この人世の裏面に、どんなに意外な、陰惨な秘密が隠されているかということ、まざまざと見せつけられた様な気がします。それは、実に、あの悪夢の世界でしか見出すことの出来ない様な種類のものだったのです。

旭屋の主人というのは、サード卿の流れをくんだ、ひどい惨虐色情者で、何という運命のいたずらでしょう、一軒置いて隣に、女のマゾッホを発見したのです。古本屋の細君は

彼に劣らぬ被虐色情者だったのです。そして、彼等は、そういう病者に特有の巧みさを以て、誰にも見つけられずに、姦通していたのです。……君、僕が合意の殺人だといった意味が分るでしょう。……彼等は、最近までは、各々、正当の夫や妻によつて、その病的な慾望を、かろうじて充みたしていました。古本屋の細君にも、旭屋の細君にも、同じ様な生傷のあつたのは其証拠です。併し、彼等がそれに満足しなかつたのは云うまでもありません。ですから目と鼻の近所に、お互の探し求めている人間を発見した時、彼等の間に非常に敏速な了解の成立したことは想像に難くないではありませんか。ところがその結果は、運命のいたずらが過ぎたのです。彼等の、パツシヴとアクティヴの力の合成によつて、狂態が漸ぜんじ次倍加されて行きました。そして、遂にあの夜、この、彼等とても決して願わなかつた事件を惹ひきおこ起して了つた訳なのです……」

私は、明智のこの異様な結論を聞いて、思わず身震いした。これはまあ、何という事件だ！

そこへ、下の煙草屋のお上さんが、夕刊を持って来た。明智はこれを受取つて、社会面を見ていたが、やがて、そつと溜息をついて云つた。

「アア、とうとう耐え切れなくなつたと見えて、自首しましたよ。妙な偶然ですね。丁度

その事を話していた時に、こんな報導に接しるとは」

私は彼の指さす所を見た。そこには、小さい見出しで、十行許り、蕎麦屋の主人の自首した旨が記しるされてあつた。

青空文庫情報

底本：「江戸川乱歩全集 第二巻 屋根裏の散歩者」光文社文庫、光文社

2004（平成16）年7月20日初版1刷発行

底本の親本：「江戸川乱歩全集 第三巻」平凡社

1932（昭和7）年1月

初出：「新青年」博文館

1925（大正14）年1月増刊

入力：砂場清隆

校正：湖山ルル

2016年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

D坂の殺人事件

江戸川乱歩

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>